３月号　　第２４７号
発行日　平成２４年３月１日（木）
発行所　八王子の碁を楽しむ活きいき連合
住　所　八王子市みつい台２－１３－１２
ＴＥＬ　（０４２）６９１－３６７１
発行人・磯部　信広
編集者・三浦　和夫

碁楽連の目的

碁楽連は、八王子市内に居住する高年者が、囲碁を通じて親睦を図り、かつ、健康を維持できるようにその機会を提供し、高年者の福祉の増進に寄与することを目的とする。

http://www.shiminkatudo-hachioji.jp/gorakuren/

強くなるために

川口やまゆり寿囲碁同好会　松崎　邦夫

『日本の名随筆［囲碁］（中野幸二編）』の中に「強くなるために（藤沢秀行著）」という随筆を見つけました。少しでも強くなりたいと思っている私には気になる題名です。この本は二十年くらい前に出版されたものですが、今まで目につかなかったのが不思議です。

どこにいっても、「どうすれば碁が強くなるか、いい方法はないか」と聞かれ、藤沢さんは「そんな方法があれば私が知りたい」と答えていたそうです。努力しないで強くなる方法はない、という思いがこのような回答になったのだと思いますが。この一文は前述の「強くなるには？」という問いに応えて書かれたものだと思います。

この中で、アマ本因坊とかアマ十傑戦で何度も優勝したことがある村上文祥さんの例を紹介してます。村上さんは、「どんなに夜遅く帰っても、帰宅したら毎日棋譜を見て一局並べる」と言っていたそうです。これはなかなか出来ることではありません。そこで、普通のアマチュアが簡単に出来る方法として、新聞に載っている碁を必ず見ることを勧めています。ごく基本的な定石ぐらいなら、新聞の碁を毎日読んでいれば自然に覚えるとも書いてあります。

それから実戦です。局数は少なくてもいいから打っていないと実力はつかないということです。強くなるには「実戦と詰碁」と思っていましたが、どうもそれだけでは駄目のようです。詰碁だけだと思考が局部に偏りがちになってしまいます。盤

面全体に目を配るには棋譜を並べることが良い、ということでしょう。

そういえば、私がまだ初段くらいだったころ、プロ棋士の棋譜を並べていたことを思い出しました。どこがどう変ったのか自分では分かりませんでしたが、勝率が上った記憶があります。そのころは石を取ることが楽しくて、そのことばかり考えて碁を打っていました。だから、なお効果があったのかもしれません。

確かに棋譜を並べることは効果がありそうです。必ず新聞の囲碁欄を見て、時間がつくれたときには棋譜を並べる。そういうことをしてみようかと考えています。

タイトル囲碁大会の結果

タイトル囲碁大会が去る２月１２日に開催されました。

参加者（６０名）	優　　勝
名人戦（２０名）	小池晴高　６段/恩方→７段に昇格
王座戦（２１名）	高取民治　３段/川口→４段に昇格
天狗戦（１９名）	岩田大平　５段/浅川→６段に昇格

平成２４年度定例総会の予告

日時　平成２４年３月１１日(日)　9：15~11：45

会場　東淺川保健福祉センター　４階

出席予定者　碁楽連会長、碁楽連理事　各地区寿同好会会長　相談役・技術顧問・指導員・特別任務委嘱者　他

議題　事業報告、決算報告、事業計画、予算、提案事項　他

第２０回　活きいき囲碁淺川大会のご案内

日時　平成２４年４月１日（日）受付　午前９時 00 分～９時 30 分

会場　横山南市民センター（椚田町 137-3　Tel　666-0031）

主催　淺川寿囲碁同好会（会長　望月　成一）

後援　日本棋院　八王子市　八王子市教育委員会

参加資格　市内に居住している60歳以上で10級以上の囲碁愛好者
参加費　　７００円（弁当代を含む）非会員　８００円
競技方法　３ないし４のクラス別に行い、入賞者には賞品を進呈します。
申込先　　会長・望月　成一　　初沢町1227-4-A-522
　　Tel・Fax　663-9758
申込期限　３月１８日
申し込み方法　なるべく所属同好会の会長を通して申し込んでください。

投 稿

今に生きる

浅川寿囲碁同好会会長　望月　成一

今年の正月５日、日本棋院の打ち始め式に１２名で参加。一昨年から続けて３回目です。初めに昨年タイトル戦で活躍した棋士がステージに上がり挨拶。中でも棋聖戦を一週間後に控えたタイトル保持者張栩、挑戦者高尾紳路両氏の言葉の中に静かな口調ではあるが､絶対に負けない決意のプロ棋士の燃える魂の雄叫びを感じた。

式典が終るとプロ棋士を交え宴席が始まる。酒を呑み、サインをお願いしたり、日頃思っていることを伝えることが出来た。最後にプロ棋士と２面打ちを行う。私は美人の中島美絵子２段と打ち４目勝ちとなる。これはプロ棋士のお正月のサービスか、いずれにしても春から幸先がよい。

近年、日本の歴史を振り返ると、昨年は東日本大震災を経験した厳しい年であったが、幕末、明治後半の日清・日露戦争、昭和前年の世界的大不況、そして世界大戦前後の混乱といつの時代も平和な穏やかなときは少なかったと思う。

私も今年は世にいう後期高齢者７５才の仲間入りします。いよいよ人生の総仕上げの時を迎えました。私の尊敬する師が「希望は人生の宝なり、今に生き常に希望を持てる人は幸いなり、希望のある限り人間には行きづまりがない」との箴言に感動した。いつまでも、夢と希望ある人生を創造し走り続けたい。そして、私は一人でなく多くの友人と一緒の気持になって、共に励まし共に喜びあって、今を大切に力一杯生き、残りの人生を謳歌したい。

若山牧水と老神温泉

北野寿囲碁同好会相談役　刃根　正樹

（一）

『浪浪浪　沖に居る浪　岸の浪　やれ待てわれも　山降りて行かむ』『またもわれ　旅人となり　けふここの　みさきをぞ過ぐ　いとしきは浪』

若山牧水の海をよんだ句である。北野市民センターの図書館で、ふと手にした牧水の詩集であった。頁をめくると、海や山そして旅の歌が、津波のように押し寄せてきた。

『幾山河　越えさり行かば　淋しさの　はてなむ国ぞ　今日も旅ゆく』『かみつけの　利根のこほりの　老神の　しぐれ降るなかを　われは来にけり』

老神（オイガミ）温泉。なつかしい名である。３０才代に私はよくこの地を訪れた。冷凍食品の枝豆を集荷するためである。鶴の子という良い品種であった。上越線の沼田で下車。奥日光行きのバスに乗った。南方に赤城山をのぞみ、椎坂峠を越えた。道は渓谷に沿い、ゆるやかに下った。山深い利根村に入り、追貝（オッカイ）の農協を訪れたのである。

枝豆の商談のあと、滝と温泉に職員が案内した。「吹き割りの滝」日本の滝１００選に入る名勝である。農協の裏手に片品川の渓谷がある。屏風岩という大絶壁が右岸にそそり立ち、河床は広く平坦であった。吹き割りの滝は渓谷の奥まった所で、優雅に艶めいた姿をして、熱っぽく私を招いていた。豊満な裸体の女性によく似た岩がうつぶせに寝て、両足を大きく開いている。川の白い清流が背中を洗って、股間にある滝壷に流れ落ちて行く。水量は豊かで、陽気な神楽ばやしのごとき水音が、私の胸に響いた。農協の職員は滝の由来を語った。「この滝壷は竜宮城に通じ、月夜には乙姫様が現れると伝えられています。その昔生活苦の百姓一家が、この滝で一家心中をしようとした。その時乙姫様の使いが現れて、米ミソ等を贈り、一家を救った。人々は以来困った時には、滝に願います」

老神温泉は滝より少し歩いた渓谷のほとりにあった。岩肌の赤茶色の崖の下に、木造のひなびた旅館が並んでいた。農協の職員は中年の芸者を呼び、酒と民謡で私をもてなした。芸者は馬に似た顔で、利根村の百姓であると微笑した。土の香りのただよう笑顔だった。「先祖代々神代のころからここの百姓でした。そのむかし、赤城の神と日光男体山の神が国争いをした。奥日光の戦場ヶ原で血みどろで戦った。赤城神は破れ、矢に当たり、この地まで逃げた。男体神が追撃して来たが、赤城神は逆襲し、見事追い返したので、追貝（オッカイ）という地名が生まれたのです」「赤城神はここに弓を立て、温泉を呼び、傷の手当をしたのが老神温泉の由来といわれます」

男体神は大蛇の化身、赤城神は大百姓と伝説でいうが、古来この地を支配した豪

族であろうよ。天応二年勝道上人が男体山を開山し、二荒神社が建立され、修験道の聖地となった。一方赤城山神は承知六年従五位の贈位が下り、農業の神として全国に多数の分社がある。ご神体は美人の姉妹で、大した人気だ。枝豆も赤城山神の贈り物であろう。

（二）

さて、一方牧水である。老神温泉を詠んだ歌がある。『わかきどち　おみな子さわぎ　出でゆきし　あとの湯舟に　われとおうなばかり』『日かげに　わずかに見ゆる湯のなかの　この二三人　ものいわぬなり』

その後牧水は、老神から奥日光へと自然をめでながらきままな旅を続けた。丸沼の手前で、すばらしい柳の老樹を見出した。それは老神の名にふさわしい神々しい姿で、たたずんでいたのである。

『時しらず　ここに生いたち　枝張れる　老木を見れば　なつかしきかも』牧水のほほえみが目に浮かぶ句であった。詩集の巻末にある牧水の写真が、私にふと笑いかけて来た。あたたかい友情が伝わってくる。彼の魂がやさしく語りかけた。「刃根さん、ともに酒をくみかわしたいものですな」「私こそ牧水さんと酒をのみあかし、詩歌について語りたい。老神温泉に二人で旅したいと思います」「歌人にも老神はおりましたな。まず西行、それに芭蕉というところですかな。小野小町も老いを歌った」「牧水さんこそ老神にふさわしい句を作られました」牧水の霊は淋しい笑顔を浮かべ、ふと消えた。酒をよむ彼の声が聞えた。『白玉の　歯にしみとほる　秋の夜は酒はしずかに　のむべかりける』『酒ほしさ　まぎらわすとて　庭に出でつ　庭草を抜く　この庭草を』

この句をよむ、やがて４４才の若さで、彼は世を去った。肝硬変に胃腸病を患っていた。何という若さの死か。彼が西行の齢まで生き、人生の幽玄な作品をもっと残せなかったことを惜しむ。

西行の『願はくば　花の下にて　春死なん　そのきさらぎの　望月のころ』芭蕉の『旅に病んで　夢は枯野を　かけめぐる』そして牧水『わたつみの　浪のひとひら　掌に持ちて　死なむとぞ思う　夕陽の前に』日本民族は美しい芸術の心を抱いていると思う。『白鳥は　かなしからずや　空の青　海の青にも　染まずただよう』『黒いろの　あやしき鳥よ　やよ鳥　ここの港に　数おほき鳥』

牧水の魂はまさに白鳥のように、純粋で美しかった。それは今も青く澄んだ空や海の上を、自由にただよっていることであろう。

私は喜寿を迎え、牧水より３０年余も生きながらえたが、傷つき汚れた鳥のごとき老残の身をもてあましている。しかし鳥は日本の歴史に深くかかわっている。昨年の女子サッカーワールドカップ。金メダルをとったなでしこジャパンは、熊野神社の八咫烏のお守りを身につけて、たたかい抜いたのである。

ここで牧水に贈る私の一句がある。『白鳥も八咫鳥もまた　囲碁の色　老いにし日々のよき友にして』

碁が強くなりたい

北野寿囲碁同好会　稲葉　重雄

誰もが思う。番数をこなす経験なのか、心の持ち方なのか、定石の勉強か、勝負にこだわる気力の問題か、自分には何が欠けているか。

昨年のアマチュア世界選手権で日本代表は８４才の平田博則さんだったが、５位入賞の立派な成績を残した。身体能力を競うスポーツとは違う頭脳ゲーム囲碁将棋でもプロの世界では、タイトル戦など２日にわたる体力勝負となる。しかし体力ではなさそうだ。平田さんは何が優れているのだろうか。アマチュア将棋の強豪、町田の渋谷さんは９０才で６段とか、私の友人アマ将棋６段のＳから聞いた話である。「あの年でとにかく強い。渋谷さんは都議会議長でもあるし」。（渋谷さんは将棋の羽生を生んだ八王子将棋道場がある渋谷ビルの所有者である）。

どうやら強くなれるのは年令とは無関係のようだ。

○　ミスをしない

アマチュア本因坊を幾度も取った三浦さん（八王子）が言う。「私が負けた試合では、相手に作戦の上で敗れたことよりも、自分のミスで負けた例が多いように思う」と語っていた。我々には毎回思い当たる話だがどうだろう。ミスの連続だからだ。特に早打ちの人にしばしば思い込みであったことに臍を噛む場合が多い。あるとき「この一手に１０秒の間をおく」ことを己に課して見た。１０目の石が当たりになっても１０秒考える？これが出来ない。しかし他に１０目以上の手があるかもしれない。

○　上達の秘訣

３０年以上前になるが、アマチュアタイトルを数々取っていた村上文祥さん（囲碁４傑の一人、菊地、三浦、平田、村上）があるタイトル戦取得の後、記者の強くなった秘訣は？の質問に「私はプロ棋士の棋譜をひたすら並べることをしました」。村上さんは当時荏原製作所の部長職にあった。碁会所で腕を磨く時間も無かったと言う。「一局並べるのに最初は４５分くらいかかったが、だんだん短くなって１５分位までになった。自分の上達の目安になったように思う」。私はこの記事を見て、はたと膝を打つ思いであった。「プロは５分ぐらいで並べるらしいよ」とも言った。また「肝心のことは解説を読まないことにした」この一言が強烈な示唆だった。私は実行した。しかし、いまだに４、５段をうろちょろ。やはり素質が問題なのか。

○　序盤が面白い

私は将棋もアマ４級くらいらしいが、ＴＶ観戦で序盤が面白く見られるようになった。３,４の角道か８,４の飛車先かその瞬間に強い興味を覚える。３,４歩から角交換後の緊張感が伝わる。

囲碁番組である女流棋士が一礼後いきなり４,２黒と打った。相手はしばし呆然と思ったがそうではなく淡々と進んでいった。プロの世界ではたまに見られるらしい。序盤が面白く見られるのは、少しは己の進歩かなあと考えているのだがどうだろうか。

先で一着目を星に打った場合、白が桂馬にかかる、お決まりの形が出来た。黒が一間に受けるか桂馬に受けるか、又は星あたりに挟むか、受けずに他の隅に先着するか大いに悩む。プロが序盤に時間を使う気持ちがわかるようになった。

○　岡目８目

将棋の村上一ニ三８段がタイトル戦でのことだが、相手がトイレにたった後すぐ、相手の席にたって盤上を見る姿がＴＶに映ってあった。その局面で相手の考えている手が読めるのでは？とその行為をとらせた。プロの凄まじい根性をそこに見る。

碁会所で好敵手同士の周りに人が立つ。終局後「ここはこう打てば死んでいた」などと意見が指摘される。勉強になる一瞬だ。これが８目。客観的な正着が示される。

岡目の心境を常にもてないものかを、ここのテーマとしたいが難しい。ある高段者のアドバイス「相手が打った石に気をたられるな、反対方向に目を向けよ」生死を争う局面では一手一手に気を奪われ岡目にはなれない。小学校時代片思いをした相手の女の子を思い出したらどうだろう。ふーっと一息入れるのはどうだろう。人それぞれが岡目の心境を工夫するしかなさそうだ。

○　年寄りは着手が早い

私のことでもある。日常の生活でも判断の速さを自賛することも多い。老人は過去の経験から即座に結論を出したがる。経験者の中でもそれを誇る人さえいる。囲碁将棋の場合、結果の正誤は勝ち負けで出されるから後悔の連続だ。碁は楽しめれば良いと言う人と、強くなりたい人に分かれるが、負けたら気分が悪いし、楽しい気分にはなれない。負けたことへの弁解として楽しめればと、自分への慰めとするのではないか。老人は何事も豊富な経験の中から即座に結論を出せると信じているようだが、経験の中から出たものを繰り返すのでは、新しいものが生まれないのではないかと思う。囲碁の場合ベストの次の一手が、何百とあるのだから瞬時には選べないはずだ。

つぎの一手には１０秒ぐらいは間をおくべきだと常づね思う。

◎お知らせ

碁楽連副会長に三上靖宏氏が就任しました。

◎訂正

前号２月号の１頁の日付を間違いました。お詫びいたします。

誤:３月号、平成 24 年 3 月 1 日（木）→　正:２月号、平成 24 年 2 月 1 日（水）

◎第１１回　碁楽連理事会

日時　　平成２４年１月２８日（土）９：００～１２：００

出席者：理事５名（欠席三上理事)、望月・端山氏

議案　：副会長の指名について

諮問委員会からの答申について

定例総会準備・議案書作成日程・分担について

退任する技術顧問、委嘱者に対する謝礼について

タイトル囲碁大会の準備、分担について

◎第１２回　碁楽連理事会

日時　　平成２３年２月１８日（土）９：００～１２：００

出席者：理事６名

議案　：定例総会議案書の編集・検討

編集後記　前号の日付を間違いました。今後充分注意したいとおもいますが、本号で私の編集業務は終わりです。３月１１日の総会を以って磯部会長、長谷川理事共々理事を退任します、２年間ご協力有難うございます。

三浦